

(Version: 2015/11/6)

KKT 方程式

柏木 雅英

1 KKT 方程式

$f : \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$, $g_i : \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$, $h_j : \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ とし、

$$\begin{aligned} \text{minimize:} & \quad f(x) \quad (\text{目的関数}) \\ \text{subject to:} & \quad g_i(x) \leq 0 \quad (1 \leq i \leq m) \quad (\text{不等式制約}) \\ & \quad h_j(x) = 0 \quad (1 \leq j \leq l) \quad (\text{等式制約}) \end{aligned}$$

のような最適化問題を考える。これに対して、この問題の解であるためのある種の条件として、次のカルシュ・クーン・タッカー (Karush-Kuhn-Tucker) 条件がよく知られている (例えば [1])。

$$\begin{aligned} f'(x) + \sum_{i=1}^m \lambda_i g'_i(x) + \sum_{j=1}^l \mu_j h'_j(x) &= 0 \\ \lambda_i \geq 0, \quad g_i(x) \leq 0, \quad \lambda_i g_i(x) &= 0 \quad (1 \leq i \leq m) \\ h_j(x) &= 0 \quad (1 \leq j \leq l) \end{aligned}$$

λ_i, μ_j はいわゆるラグランジュ乗数 (Lagrange multiplier) である。この条件と元の最適化問題との関係は複雑だが、例えば f, g_i が微分可能な凸関数で h_j がアフィン関数ならば、 x が元の問題の最適解であることと x が KKT 条件を満たすことは同値であることが知られている。

この条件を元に解を精度保証付きで計算することを考える。このとき、不等式制約が邪魔なので、これを除去することを考える。例えば [2] では、次のような除去方法を用いている。関数 $\alpha^+(x), \alpha^-(x)$ を、次のように定義する。

$$\begin{aligned} \alpha^+(x) &= \max(0, x)^r \\ \alpha^-(x) &= \max(0, -x)^r \end{aligned}$$

ここで r は非負整数である。 $r = 1$ でも良いが折れ線となってしまう計算しづらいので、 $r = 3$ くらいで滑らかさを確保するのが良さそう。

この関数を用いて、KKT 条件と同値な方程式を次のように作成する。

$$f'(x) + \sum_{i=1}^m \alpha^+(\beta_i) g'_i(x) + \sum_{j=1}^l \mu_j h'_j(x) = 0$$

$$\alpha^-(\beta_i) + g_i(x) = 0 \quad (1 \leq i \leq m)$$

$$h_j(x) = 0 \quad (1 \leq j \leq l)$$

すなわち、 λ_i と $g_i(x)$ のどちらかが 0 であるという相補性を表現するのに、 β_i という変数を使って、 $\beta_i \geq 0$ なら $g_i(x) = 0$ で $\lambda_i = \beta_i^r$ 、 $\beta_i \leq 0$ なら $\lambda_i = 0$ で $g_i(x) = -(-\beta_i)^r$ という関係になっている。つまり β_i が正ならその不等式制約は有効 (active)、負なら無効 (inactive) である。この式は制約の無い $n + m + l$ 変数の非線形方程式になっているので、Krawczyk 法などを用いて精度保証出来る可能性がある。

2 例題 1

$$\begin{aligned} \text{minimize:} \quad & (x_1 - 2)^2 + (x_2 - 3)^2 + (x_3 - 4)^2 \\ \text{subject to:} \quad & x_1^2 + x_2^2 + x_3^2 - 1 \leq 0 \\ & 4x_1 + x_2 + 2x_3 - 2 = 0 \end{aligned}$$

この問題に対する KKT 条件は、

$$\begin{aligned} 2(x_1 - 2) + 2\lambda_1 x_1 + 4\mu_1 &= 0 \\ 2(x_2 - 3) + 2\lambda_1 x_2 + \mu_1 &= 0 \\ 2(x_3 - 4) + 2\lambda_1 x_3 + 2\mu_1 &= 0 \\ \lambda_1 \geq 0, \quad x_1^2 + x_2^2 + x_3^2 - 1 \leq 0, \quad \lambda_1(x_1^2 + x_2^2 + x_3^2 - 1) &= 0 \\ 4x_1 + x_2 + 2x_3 - 2 &= 0 \end{aligned}$$

であり、KKT 方程式は

$$\begin{aligned} 2(x_1 - 2) + 2\alpha^+(\beta_1)x_1 + 4\mu_1 &= 0 \\ 2(x_2 - 3) + 2\alpha^+(\beta_1)x_2 + \mu_1 &= 0 \\ 2(x_3 - 4) + 2\alpha^+(\beta_1)x_3 + 2\mu_1 &= 0 \\ \alpha^-(\beta_1) + x_1^2 + x_2^2 + x_3^2 - 1 &= 0 \\ 4x_1 + x_2 + 2x_3 - 2 &= 0 \end{aligned}$$

となる。

α^+, α^- の r を $r = 3$ とする。この方程式に対して Newton 法を実行したところ

$$\begin{aligned}x_1 &= -0.042942568928901338 \\x_2 &= 0.64380803037857814 \\x_3 &= 0.76398112266851359 \\\beta_1 &= 1.4127165980054175 \\\mu_1 &= 1.0820086014230621\end{aligned}$$

という近似解が得られ、Krawczyk 法を実行すると

$$\begin{aligned}x_1 &\in [-0.042942568928901602, -0.042942568928901039] \\x_2 &\in [0.64380803037857692, 0.64380803037857948] \\x_3 &\in [0.76398112266851248, 0.76398112266851459] \\\beta_1 &\in [1.4127165980054161, 1.4127165980054189] \\\mu_1 &\in [1.0820086014230609, 1.0820086014230633]\end{aligned}$$

のように精度保証された。

3 例題 2

線形計画問題にも適用可能なので、[3] の Example 1 に適用してみる。

$$\begin{aligned}\text{maximize:} & \quad 3x_1 + 2x_2 \\ \text{subject to:} & \quad -x_1 + 3x_2 \leq 12 \\ & \quad x_1 + x_2 \leq 8 \\ & \quad 2x_1 - x_2 \leq 10 \\ & \quad x_1 \geq 0 \\ & \quad x_2 \geq 0\end{aligned}$$

KKT 方程式を作って Newton 法を行うと、

$$\begin{aligned}x_1 &= 6 \\x_2 &= 1.9999999999999998 \\\beta_1 &= -2.2894284851066637 \\\beta_2 &= 1.3263524026321305 \\\beta_3 &= 0.69336127435063477 \\\beta_4 &= -1.8171205928321397 \\\beta_5 &= -1.2599210498948732\end{aligned}$$

という近似解が得られ、Krawczyk 法を実行すると

$$\begin{aligned}x_1 &\in [5.999999999999982, 6.000000000000018] \\x_2 &\in [1.999999999999991, 2.000000000000009] \\ \beta_1 &\in [-2.2894284851066647, -2.2894284851066628] \\ \beta_2 &\in [1.3263524026321293, 1.3263524026321319] \\ \beta_3 &\in [0.69336127435063221, 0.69336127435063733] \\ \beta_4 &\in [-1.8171205928321402, -1.8171205928321392] \\ \beta_5 &\in [-1.2599210498948737, -1.2599210498948727]\end{aligned}$$

のように精度保証された。

(注意) 線形計画問題の場合 KKT 方程式に対して直接 Newton 法を適用すると極めて収束性が悪く、別の手段で近似解を得てから最後の精度保証の部分のみ Krawczk 法を使うべきであると思われる。

参考文献

- [1] 福島 雅夫：“非線形最適化の基礎”，朝倉書店 (2001).
- [2] W. I. Zangwill, C. B. Garcia: “Equilibrium programming: The path following approach and dynamics”, Mathematical Programming, Volume 21, Issue 1, pp 262-289 (1981).
- [3] Shin'ichi Oishi and Kunio Tanabe: “Numerical Inclusion of Optimum Point for Linear Programming”, JSIAM Letters Vol. 1, pp.5-8 (2009).